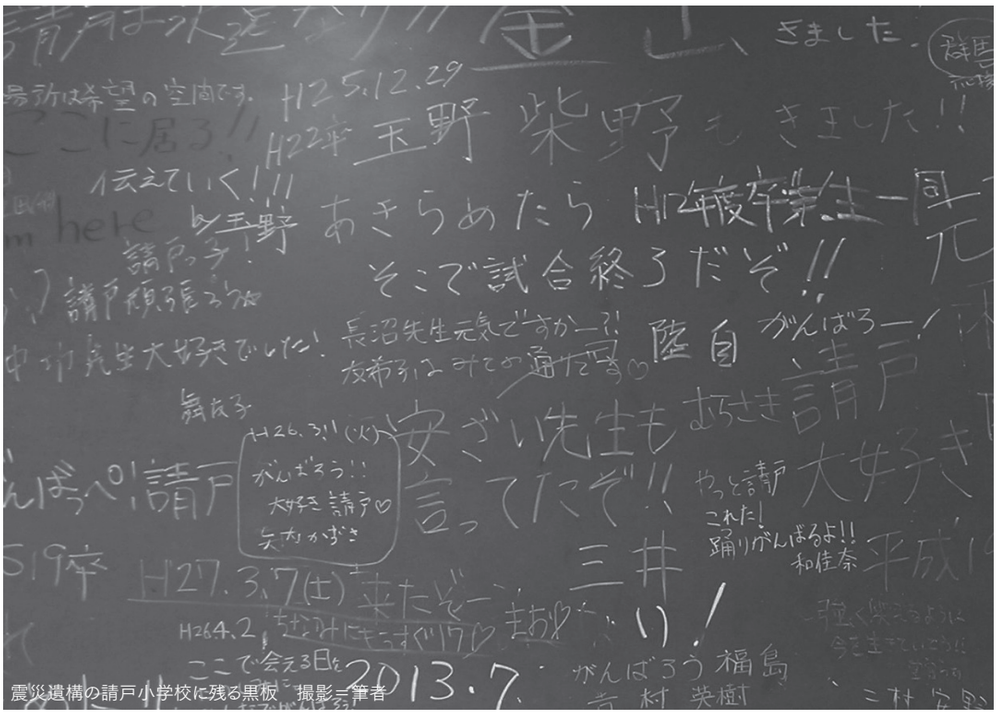
インサイド／アウトサイド❷

いち推し「フルハウス」
柳美里が始めた新荒野「フクシマ」におけるまちづくり



震災遺構の請戸小学校に残る黒板　撮影＝筆者

「原発から半径20kmが閉ざされると聞いた時、
子どもの頃に見た田子倉ダムの底に沈んだ田子倉集落と重なった」。
新荒野となった福島の記憶をどう継承していけばよいのか

佐藤敏宏

『電力県ふくしま』を紐解くと敗戦後最大規模の電源地帯として脚光を浴びた只見川開発の経緯が記されている❖1。柳美里は母親から「田子倉ダムには友達の家や川やお寺や学校やお墓があったけどみんな沈んでしまった。だからここには哀しみが沈んでいるのであまり近寄ってはいけない」と聞かされ成長したと語る❖2。田子倉部落の人は大阪圏にゼンマイを売ることで経済的にも自立していたようで、ダム建設反対運動は激しさを増し、農婦は測量員に糞尿をひっかけるなどし❖3建設を止めようとした。「先祖伝来の土地を湖底に沈めるのだから、祖先の居るところまで知事サン一緒にいってくなんしょ。そして口説いてくねぇべか」と。大竹作摩知事は「そんならない、俺も先祖さまのところへいくべぇ。だけんど道がわかんねがら誰か案内してくなんしょ」と応じ、知事と村民の直折衝の様を写真付で紹介している❖3。

「電源県」福島の歴史

同書には核兵器の民需転用であり原発の父と呼ばれ、CIAのエージェントでもあった正力松太郎❖4の紹介もある。正力や中曽根康弘らは「まだ基礎研究が足りない」と語る原子物理学者・湯川秀樹の意見と対立。「原子力発電はすでに実用段階にある。5年以内に実用的な原子力発電所を始める」と正力が独断発言❖5し、読売新聞、日本テレビなど配下の機関を使い「平和利用博覧会」によって世論誘導に成功し原発を建造してしまった。日本人は原発についてほぼ無知のもと、福島第一原発建設に際しては、設計図はスペインのサンタマリア・デ・ガローニャ発電所のまま、揚水ポンプの能力が10mしかないので、大熊の大地を25m削ってつくられた。海抜35mまま建設、揚水ポンプの設計変更による高額請求を逃れた。GEに工事監理を丸投げし完成したらキーを差し込み回せば稼働する「ターンキー契約」だった❖6。そうして日本列島に原発54炉への道を拓いた。福島に10機原発設置を図った木村守江知事は『電力県ふくしま』で河原田元県会議長の「放射能は今の科学の力で防げるんでしょう」という呼びかけに「電気がはじめて通ったときにさわって死んだりなんかしている。そういうもんでね。原子力に対する知識が出てくればさしつかえないと思うし、県でも最大の注意を

『巨怪伝 正力松太郎と影武者たちの一世紀』(文春文庫,2000年)、
『原子力政策研究会100時間の極秘音源：メルトダウンへの道』(新潮文庫,2016年)

「千万家」の俯瞰写真

福島県本庁舎時計塔　提供＝福島県施設管理課

払ってやっている」❖7と、福島第一原発によって人が死んでも容認する(?)かのような発言であり、原発の知識が無い常態で稼働させてしまっていることを認めていると理解できる内容だ。木村にかぎらず、東電原発のビックボスであった豊田正敏は「35mの高さだったら津波の被害を受けなかった…経済的に安くすむことからGEを選んでターンキー契約し…それをくつがえしたら全く意味がない」と経済優先だったと語る。さらに「非常電源を発電するためのディーゼルがタービン建屋の中にあることは気が付かなかった…GEの下請けであったエバスコ社の設計ミスでしょうね。…誰も気が付かなかったのも何かおかしいけどね」と❖8加えている。このように官民ともに原発に無知で湯川の言葉に耳をかさず、GE任せで稼働し続け世界を震撼させた福一原発事故・人災を起こしたと自覚し、電力県の歴史を振り返ることから始めるべきだ。

記憶の継承

水素爆発の白煙の映像は、県職員が「福島は終わった」と口走るほどショッキングだった。3・11後の福島再建は、県民が一丸となり築きあげた電力県の記憶とそれまでの時間の再生結続をもって今、始めるべきだ。本庁舎にあった今はなき時計塔が放つオルゴールの姿と音を記憶している人は多い。本庁舎が完成すると老若男女が押しかけ観光ブームの有様だった❖9。あの記憶を保全継承しないまま3・11後の福島のまちづくりはありえるのか。大竹作摩が東電と東北電力などから多額寄付を得、県職員給与の一部を特別寄付し築造した福島県のシンボルを失ったまま、福島の可能性を刻みつづけ「時」を知らせた、オルゴールを忘れ復興を語る者は、3・11に乗じ福島県の記憶や文化を一気にゴミ化へ導く破壊者だろう。

柳美里が小高に立った訳は「原発から半径20kmが閉ざされると聞いた時❖10、子どもの頃に見た田子倉ダムの底に沈んだ田子倉集落と重なった。ダムの底の集落は行って見ることができないけれど、半径20km閉ざされる前だったら行けると思って行ったのが最初で、そこから小高に通うようになった」と語る❖2。私は柳の『魚の祭』を映像で観た❖1。明暗だけの光の円柱のなかを人が行き交う舞台構成だった。数年後、私は「魚の祭」の舞台をそのまま模倣転用、円柱を増殖させ外壁を一部蒸発させた『千万家』をつくった❖12。彼女のテーマである家族の現在を告発し問う姿勢は、人に普遍的なテーマであり同時に酷く正解がない問いでもある。そのことは読者自身の家族を見れば納得可能だろう。福島法❖13によってつくられた建造物たちに記憶継承を感じにくい。だが、柳が小高に取得し改修された建築群の表象は、3・11以前とさほど変わらず既存建築を基にしている。私的行為が小高の肉声と共振し合い公共圏化し、暮した人々の記憶を継承した姿をしている。だから虚飾なく少し未完の記憶を継承した姿をしている。柳の町づくりの意図は明確に顕れる。それは社会状況に影響され、刻々変わる歴史と記憶を引き継ぎ生きている建築と、生きているまちづくりの真の姿を内包している証でもある。　新荒野

記憶消しゴム　突っ走る。

柳美里さんとの2ショット。2018年12月1日、LaMaMa ODAKAでのトークショーにて

さとう・としひろ

1951年福島市生まれ。1970年県立工業高校卒業。同年、新井組東京支店設計部勤務、1980年退社。1982年 TAF 設計を開所。1984年自邸をつくり、俺の家はお前の家という「建築あそび」活動を開始し2007年まで続ける。2008年より現在まで、お前の家は俺の家として全国各地の住宅や事務所などを借り「ことば悦覧」という建築若手や研究者を対象とした対話活動を続け記録を HP に公開。手づくりの小さな公共圏を実践中

【参考文献】

❖1……『電力県ふくしま―県民総参加の記録』1973年3月刊行。
❖2……ポリタスTV＃483――2022年4月19日
❖3……『電力県ふくしま』176頁、242頁
❖4……『原発・正力・CIA』『巨怪伝』参照
❖5……『原子力政策研究会100時間の極秘音源――メルトダウンへの道』102頁前後。2016年3月発行
❖6……同書208頁前後
❖7……『電力県ふくしま』282～3頁、1972年10月27日に対談
❖8……❖5の211頁～
❖9……『電力県ふくしま』299～300頁
❖10……22021年4月22日頃か
❖11……『魚の祭』柳美里の戯曲。1992年初演。第37回岸田国士戯曲賞を受賞
❖12……千万家(せんまんいえ)設計1996年6月～1999年11月、竣工2000年5月
❖13……福島法 福島復興再生特別措置法。平成24年3月30日成立